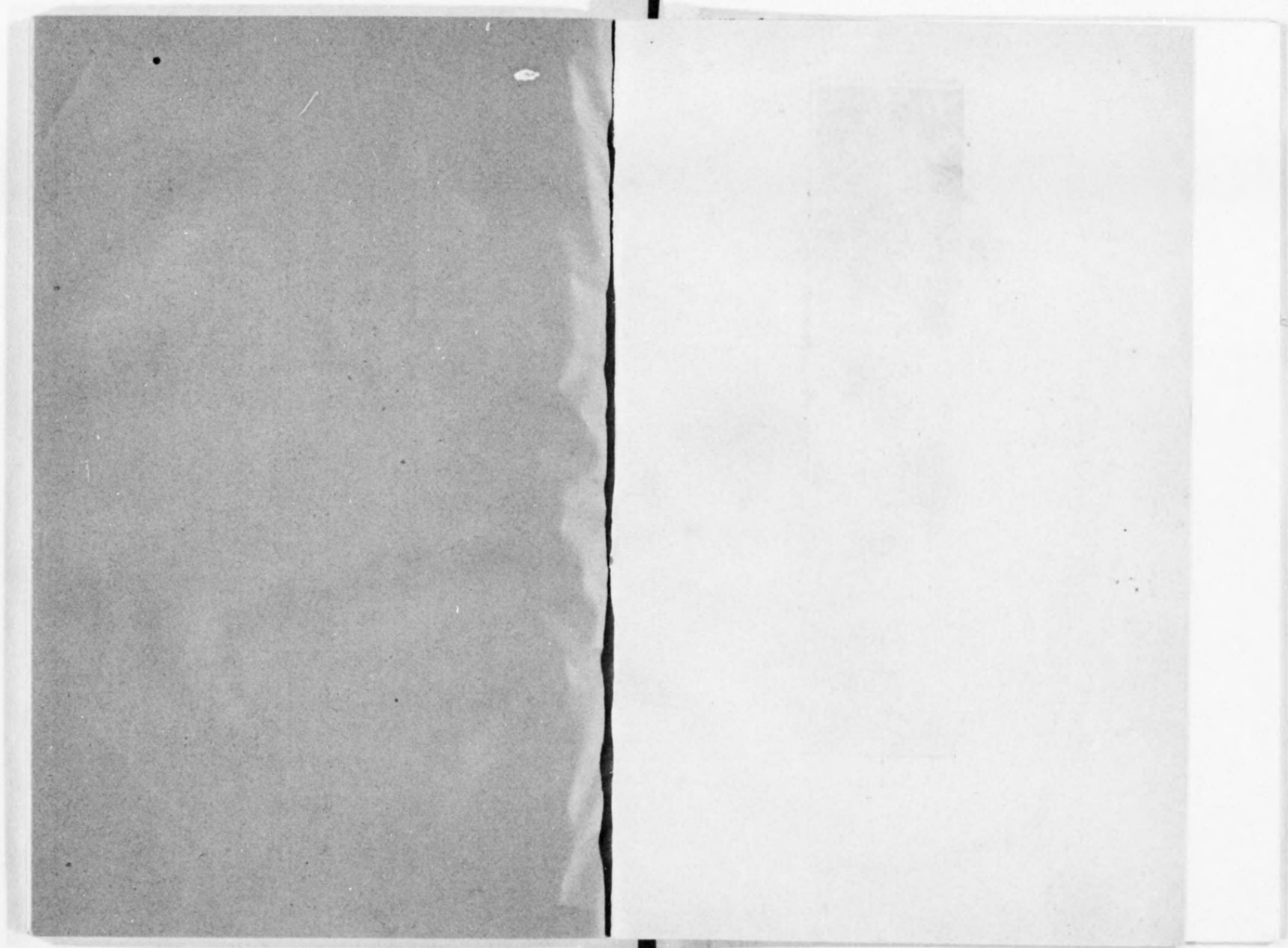


164
464

改訂
増補
六庫全書
史談要全







例言

一本書は郷土史談の一斑として縣下事蹟の大要を記せしものなり只青年者をして郷土の事蹟を知るの一助たらしめんと欲する微意のみ、

一本書内社寺名所(多くの歌所)舊家山川港汨墳墓等の史談に因みあるものいと多しと雖事荒唐に渉るあり又判然せざるものありて且は煩はしければこゝに省きたり、

一本書内國名郡名村名等の起源よりして間



々史談に關するの談柄なきにあらざれども
 ころもまた茲に省きたり、
 一本書記する所は古今の書より引き又は見
 聞上より記載せるものにて時に疑義の廉
 をも併記せり、
 一書中記す處彼に密にして此に粗なるを免
 れどと雖事の漠然たるものは捨て、略せ
 し故なれば看者諒せよ

著者誌

目次

◎播磨の部

- 忍部史談 一
- 兒島範長史談 五
- 白旗山史談 十
- 長水城及三木合戦 十八
- 藤原保昌の事 二十三
- 赤穂義士の事 二十八
- ◎攝津の部
- 福原都の事 三十
- 湊川戦 三十六
- 有馬温泉の事 三十九
- 黒岡明神及越智益躬 四
- 舟坂山史談 九
- 姫路城の事 十四
- 細川庄の事 二十一
- 上月の城 二十五
- 一の谷及生田戦 三十三
- 長田神社傳説 三十八
- 求馬塚 四十

○伊丹の事 ……………四十五
○阿保親王の御事 ……………四十九

◎淡路の部

○多田村 ……………四十六
○神戸の開港 ……………五十

○淡路島傳説 ……………五十四

○洲本の城 ……………五十八

○淳仁天皇遺跡 ……………六十
附崇道天皇山陵 ……………六十

◎丹波の部

○龜山城史談 ……………六十四

◎但馬の部

○生野史談 ……………六十七

○仙石騒動 ……………六十九
附山名氏滅亡 ……………六十九

附録 縣下舊藩主名及領地一覽表(旗本ハ之ヲ省ク) ……………七十一

改訂 增補 兵庫縣管内史談大要

小野利教著



播磨之部

○忍部史談 (明石郡)

安康天皇の三年八月大泊瀬皇子の眉輪及大臣葛城圓を誅し玉ふや併せて皇太叔市邊押磐皇子及其帳内佐伯部仲子をも殺し玉ふ押磐の皇子の二子億計王弘計王其臣

日下部の連使主其子吾田彦と共に難を播磨に避けて縮見の屯倉の首忍海部細目の家僮と爲る會播磨國司伊與來目部小楯明石に於て新嘗の供物を備へ細目の家に宴

す二王をして歌舞せしむ二王歌に托して意を示す其謠
 に曰くいそのかみ振の神楯本をきり末をきり市邊の宮
 に天の下をしろしめす天萬國萬押盤のみことの御はつ
 子のやつここれや（日本記川添柳の歌）「いぢむしろ川をひ柳水もけばを
 ひさかきたちその根のうせず」と小楯驚き倉皇之を奏す清寧天皇
 子あし乃二王を迎へ億計王を皇太子とす後弘計王立ち
 次て億計王立ち玉ふ（小楯二王子に謁せしは清寧天皇二年冬十一月也）今明石郡王子村
（二王子龍潜の地あり故に村名とぞ）に王子權現の社あり蓋二王子の靈を祭る
 う峯相記西播峯相山雞足寺住僧の著書にして播磨古記のうちにも最尊重せしもの也には宍粟郡に隠れ玉
 ふ其時の御所は當時高の市場と云ふ所なりと書せり即
 宍粟郡菅野庄高下村の内市場あり重代の者其王子を養
 ひ奉りて御即位の後其忠賞として當所を給ふと申傳へ

たり猶古書を按ずるに二王其臣と共に丹波余社郡（與謝あり）に走て難を避く使主名を改めて田た疾と來と云ふ猶害
 せられんことを恐れて播磨國縮見山の石室に往く云々
 古事記には意祁王、表祁王、乱を聞て大に恐れ逃去て山代
 の苅羽井に至て食御ウケサ糧時に面に懸せる老翁來りて其糧
 を奪ふ二王子曰糧をば惜まず汝は誰人乎答て曰く我は
 山代の猪あひかりと故に玖須婆の河を渡て逃て針間に
 至ると有て丹波國に往く事を載せ也於之使主石室にて
 私に縊れて死す二王子尙使主の往所を識る弘計王兄
 の王をそゝめて明石郡に赴た名を改めて田庭はらの小子と
 云ふ云々（余先年或る史學に有名なる博士に質せしも遂
 に正確の考證をも得ずして止みき）二三の國學者も己に

古にありて二王靈蹤の地其詳なることを知らずといへり古事記舊事記日本紀等に委しければ茲には只要を記そのみ(美囊郡ノ中央御坂村ノ北部ナル大磐山ノ南麓ハ即日下部連ノ二王子ヲ率テ隠レシ窟ノアル處也)

○黒岡明神及越智益躬

黒岡明神は播州太田郷原村にありて俗に楯鼓の原の祠といふ藤原の貞國を祀れり貞國は當國宍粟郡の人あり王命に服せざる不逞の奸民いと多かりければ勅命により逆徒退治として下向しけり當時戰捷を國津神に祈る當時の年代を詳記せし書なければ知るに由あしたゞ日碑に傳存せるのみ太田郷蓼津原に伏勢を置ふんとして竹多く生ひたり迎竹川といふちとていへり

○越智益躬は八皇三十四代推古天皇の朝に南蠻人の賊船

を今の明石郡大藏谷村はのくの濱に於て防ぎ戦ふ益躬此時己の本國ある伊豫の三島明神を祈りて遂にこゝに祭る稻爪神社これなり益躬奮戦して終に賊を追攘ひければ里人後に小祠を建て益躬の靈を祀りぬ星霜變移して今は八幡社といふとぞ(益躬の事余が事蹟者に委し合せ見られよ)

○兒嶋範長史談

延元々年足利尊氏九州より東上す脇屋義助兵を播磨の國に引き返そ兒嶋範長及其子高德等三石を越えて坂越赤穂の浦坂越の泊は秦造内磨の蘇我入鹿の難を避けて箕赤穂の浦に由で、義助に追付ふんとて(一説建武三年)一族今木大富和田松崎等二十七騎を率ゐ那波の浦手を忍び落行きけるを那波赤穂郡

の城主宇野彌三郎重氏宇乃彌左衛門次郎重氏といふと云へるは赤松の方
 あるが早くも見て取り手勢五十騎にて之を追ふ伊保庄
 に戦ふ福井庄に至り阿彌陀迄逃ぐ此間十六度の闘ひを
 あす範長は郎黨と共に六騎に打あされ道傍の辻堂に入
 り自殺そ重氏之を葬ると太平記に出たり播磨記はこれ
 を高德の墓と誤れり此時高德は手疵を負ひて爲に坂越
 より後れたれば此難に遭はず此範長主従の墓のある所
 を豆崎と云ひ俗に喧嘩塚といふとし其故を知らせさべ
 て六騎武者の塚といへり今左に日本外史より抜抄して
 補ふ所あふんとそ
 義貞の則村赤松を白旗城赤穂郡に攻むるや城固くして抜けず
 義貞の弟義助之に説いて曰く嚮に楠氏金剛山に據る北

條氏天下の兵を擧げて之を攻むれども克たせ力を一城
 に竭し顧みて天下を失ふ君盍んぞ鑑みざるや尊氏己
 に九國を並せて且つ束あ上るを聞く君宜しく兵を分ち
 城を圍んで急あ舟坂を抜き以て山陽を徇ふべしと義貞
 乃義助をして舟坂を攻めしむ舟坂の賊兵險に據て下
 ず初め尊氏關を犯そとき山陽皆之に應ず猶兒嶋高德孤
 軍を以て福山城を攻む克たせ其兵連り又叛き三石備前に
 迫る義助の舟坂を攻むを聞くに及び則喜ふ間使を遣は
 して告げて曰く三石の南ふ間道あり以て船阪の背に出
 づべし吾兵を熊山備前に起し賊をして兵を分たしめん公
 即一軍を間道よりし夾んで之を攻めば必船阪を抜あん
 船阪抜ば則西國服せざる者あしと義助大に喜び與り期

を約す期も先だつこと一夜高德父備後守範長と熊山を
上り倉卒にして族人を聚むるに及ばず兵僅に二百あり
天明も船阪山の賊果して三千人を分ち七道より來り攻
む高德防戦して重傷を終に奮撃して賊兵を走らす而義
助軍を潜めて賊の後にしむ赤松則村使を馳て尊氏に告て曰く
して福山に據らしむ赤松則村使を馳て尊氏に告て曰く
白旗城陥らば則公衆ありと雖之を用る所さかふんと尊
氏大學して東に上る水陸並び進む福山の城陥り義助兵
を引て退く菊池武重之に殿たり賊の船師陸に上り西川
尻に陳そ高德之を聞き義助も合し山を踰えて東せんと
欲そるに創劇し範長之を僧寺に託し八十餘人を以て東
走そ義貞己に白旗の圍を釋くに會ふ赤松氏の兵三百騎

範長の過るを見て呼で曰く敗卒盍乎甲を釋て降らざる
と範長笑て曰く嚮に尊氏百方我を招く輒兵書を毀つて
火に投ず人曷ぞ汝輩も降らんやと其陣を潰して出づ賊
傳呼を敗卒過ると土兵群り起る範長悉其兵を亡ふ餘る
所の者六人曰く悔くは我族を擧げて來らざるをと乃
刃も伏して死す云々(利教曰熊山は和氣郡の西南隅ありて吉井川の東
岸に聳ゆる高山也)

○船阪山史談

船阪山は赤穂郡船阪村にあり播備の界なり元弘二年三
月北條高時醍醐帝を隱岐に徙し奉る左近衛中將藤原行
房同參議少將源忠顯等從ふ賊將佐々木高氏等三千騎に
て護送そ高德さきも笠置を援けんと欲せしに笠置陥る

と聞か今又帝の西遷をきく慨然衆お謂つて曰く吾聞く志士仁人は身を殺して以て仁を成すなり義を見て爲ざるは勇あは也と盡ぞ要して駕を奪ひ以て義を擧げざる衆奮て之に従ふ船阪山に伏して待つ之を久しうして至らず人を遣はして候ぶふ曰く駕佐用郡よりして山陰に向ふと乃ち間道より作州杉坂お至れば則己に過ぐ衆乃散じ去る高德陰に尾行して及ぶ夜お乗じ帝館に忍び入り櫻樹に十字を書せしことは世己に知らざる者あり其後官軍賊軍の互に扼守して修羅の戰場たりし所あり他は茲に略す

○白旗山史談

赤穂郡白旗山城は鳥羽院の御宇從三位侍從中院大納言

季源房勅命を蒙り播磨の國司となり征夷大將軍の號を給ひ播州加古郡に下向し加古庄古大内村に移住す季房は皇第七の皇子具平親王の苗裔也親王の墓は加古郡坂本村と平野村との間にあり世に朱見塚と云ふ天永二年三月季房或夜の夢に西播磨と覺し其所に幽々たる山岳あり渺々たる大河ありて要害自然に完備せる金城の地あり折柄白幡一旒空際より降り梢にかゝるを見る覺めて秘す頃刻くして赤松庄よりして注進しけるは山巔雲氣立昇り白幡とも相見え數丈余の一片の雲の如し夜毎お顯れ人々恐怖すと季房大に喜び遂にこゝに城を築きて住を白旗城と号く一説に白旗あり一夜の間ふ天より降る故に号くると爾後赤松家の本城たり大日本史に云赤松則村の次郎と稱す具平親王の後、世々播磨の佐用庄赤松よ住を此佐用とあるの赤松の庄の誤り也則村元弘の乱に大塔

宮の令旨を奉して義兵を苦繩城赤穂郡佐用庄 苦繩村に擧ぐ後又守

護職を奪はる、や怨恨して尊氏に属す尊氏東上せるや

室津に之を迎へ直義と共に正成義貞を敗る則村四子あ

り範資貞範則祐氏範とす然るに圓心を初め一族皆南朝

に反せるに獨り氏範南朝を勤む義詮と戦ふこと數次興

長南朝に叛くや前關白師基をして之を責む吉野の兵敗

れて師基と戦ふこと一晝夜此時永徳年間にして山名師清 氏範事

の成りざるを慮り敗卒を率ゐて國を歸り男氏春家則祐

春秀則及び從兵百三十有余人と共に清水坂を激戦して

后自殺す年五十七家臣伊藤民部今村五郎等少子乙若丸

を扶けて薩摩に走る千時至徳三年九月なりき加東郡丹

波坂の傍に墓ありと云ふ初則村の反するや白旗城よと

る義貞之を攻む城壁未だ成らず則村詐つて書を義貞に

おくりて曰く元弘の初臣數々強賊を挫く而賞降虜の下

に出づ故お此お背た彼に嚮ふ豈お其志おらんや願はく

は守護の職を得て以て報効を圖ふんと義貞喜び爲に詔

旨を請ふ往返旬餘にして詔至る而壁成る則村詔書を還

して曰く守護己に之を將軍尊氏に得たり何ぞ此翻覆の繪

旨を以てするを爲さんと其猾怯言ふに絶せり其後左京

大夫滿祐に至る滿祐明德中京合戦に功あり封祿身に餘

り榮華を極む書寫の麗お城を築き御所と云ふ將軍義教

之を惡み事と觸れて侮ることあり遂に誅せんとす應永

三年六月廿四日滿祐も意を決して弑せんとし義教を己

が邸に招く義教更に意とせま直に之に赴く散樂をなす

ことさらに擾動を起し之に乗じて義教を弑す斯波義廉
 大内持世等創を被むる將士幕府に集り惶惑して爲る所
 を知らず滿祐邑に歸り白幡城に據り討手を待つ七月持
 世死す八月義教の子義勝立つに及び朝廷義勝に詔して
 滿祐を討たしむ乃細川持常赤松貞村武田信貫を遣り播
 磨よりし山名持豊山名教之同教清を美作よりせしむ兵
 凡五万人かり滿祐貞村を蟹坂(明石郡和坂村)に撃つて之を敗る
 持常姻を以て勇進せず九月持豊法花山の險に於て滿祐
 の軍を敗る連りに諸城砦を陥れ衆に先んじて白幡城に
 至る城兵略盡き滿祐遂に自殺し城陥る此等の事實は種
 々の野乘にいと委し

○姫路城の事

貞和二年赤松圓心の第二子貞範姫山の佛山(五軒邸稱名寺)を退けて居城を築き(本城は白旗山なり)是を藩鎮とそ
 是れ姫路城原起也後貞範の庄山(飾東郡庄山の莊也)に城
 を築き同族小寺頼秀をして本城を守らしむ嘉吉元年六
 月赤松滿祐に至り足利義教を殺し家斷絶す
 同年十月山名宗全持豊當國を領し入城す在城二十七年
 間全二年圓心の孫政則當國の治に復任し城主とある居
 ること三年置鹽山(飾西郡置本)お壘を築じ轉す天正五年
 羽柴秀吉當國を領し六月城主黒田孝高小寺官兵衛を退け大に
 當城を増築し三重の天守を築く
 全八年四月秀吉美囊郡三木城より移る九年秀吉城堡を
 改造し弟小市郎秀長を居らしむ秀長大納言とあるや大

和に轉ず次で肥後守家定在城す後備中足森より轉ず慶長五年池田三左衛門輝政三州吉田より移る同十三年輝政再び當城を經營し五重の天守を建て内郭を廣くし姫山の麓、宿、中、國府寺を合せ姫路と稱し城外市郭を立つ三世の孫光政に至り備前岡山に轉屯元和三年本多美濃守忠政平八郎忠勝の子勢州桑名より移る城牆を修補す尙郭外に水陸を堀り石壁を堅くそ大内記政勝に至り大和の郡山に轉屯

寛永十六年四月松平清匡出羽山形より移る居ること十一年觀松に至り山形に歸城す

慶安元年松平大和守眞基山形より移る男藤松丸翌二年八月越後村上に轉す全二年八月榑原忠次奥州白川より

移る孫熊之助に至り在城十九年間村上より轉城す

寛文七年六月松平直矩(眞基男鶴松也)入城を居ること十

六年豊後日田に轉す

天和二年本多政武奥州福島より來る在城十三年男吉十

郎に至り村上より轉す元祿十七年六月越後村上の城主榑

原政辰來り在城三十七年越後高田に轉す寛保二年松平

義和(眞矩の孫基知の男)奥州白川より來る在城七年喜八

郎より至り上州鹿橋へ移轉す寛延二年五月酒井忠知上州

鹿橋より移る明治二年酒井忠知十世忠邦封土を奉還す

尙當城を管理す同六年陸軍省所轄となり大坂鎮台之を

管理し衛戍を城内に置く城の區域五區本城一櫓十一個

往時尾引の城と云ふ白狐尾を引たて繩張をせしといひ

又宮本武藏の繩張をせしども云ひ傳世に白鷺城と云ふ
 附記宮本武藏は世人の夙に知る擊劔家なるが今播磨
 鑑の説によれば揖東郡鵜の庄宮本村の産とあり又書
 を善くす世に流布する野乗あとの説は元より信せべ
 からず肥後熊本にて卒を生存中仕官せず養子伊織明石
 小倉にて老職をちそのみ

○長水城及三木合戦の事

長水城趾は宍粟郡上町村長水山にあり天正の昔宇野下
 總守政頼こゝに居りて西播六郡の押へどあり十万三千
 石を食む嫡子熊見藏人滿重は同郡笹の丸に居る父子隙
 を生ず奸臣藏人をそゝのかして父を襲はしむ政頼牒し
 て之を知る發せざるに先じ兵を遣りて笹の丸を襲ひ遂

に藏人を殺そ其臣有元清水等奸嬌事を起し私利を得ん
 として政頼其子を殺そを奇貨とし竊めに計る所あり時
 む秀吉姫路城に在り有本等秀吉に讒して曰く滿重父の
 君誘に叛くを不可とし大に諫む政頼忻あす遂に滿重を
 殺せと政頼依て他かたを陳それども秀吉聞かざりけれ
 ば遂に政頼敵對の覺悟をなし守禦の用意嚴重ありけり
 於之天正八年正月秀吉三千騎を出し荒木平太夫神子田
 半左衛門尉を之に將たらしめ長水城を攻めしむ政頼兵
 を出して遂に戦ふ烈戦月を踰ねて決せせ且城險にたり
 堅くして援けせ更む石田三成(佐吉)を遣ひし精兵をして
 攻めしむ城中反應するものあり火を放つ政頼遂に城を
 出づ途に自殺す城陷る時天正八年六月なりと云ふ(政

頼船越山瑠璃寺奥殿めて最期)三木城のみまぎ郡にありて平山釜の城と云ふ別所小三郎長治こゝに居る赤松の末葉也義昭の三好の賊を討つや信長の頼みより一族別所重棟を遣る戦功あり重棟兄賀相と隙ありて天正六年信長西國を伐つや又別所を先陣に頼む而して權威秀吉の下あり長治喜ばず諸將曰く味方紛骨の勞を嘗むと雖後に疎忌せられて滅びんこと必せりと衆意然りとして秀吉の命を拒む同年三月長治は毛利氏に援を請ふこれより諸皆に轉戦を互に勝敗死傷あり然るに三木城兵糧盡き諸壘悉陥る而して毛利氏の援兵魚住より來り上陸する能はず長治以下屠復して士卒を宥さんことを請ふ秀吉嘉納して酒肴を送る明年一月長治友之治忠等妻子を刺し

て後自殺す賀相尙義に背き戦はんとて士卒怒りて遂に斬殺を城陥る此時天正八年正月十七日也秀吉の軍師竹中半兵衛重治陣中に死を平井村の山復に葬る墳石今尙存在す秀吉地子を免じ住民を慰す彼の大坂城にて勇名をとりし後藤基次は當時三木の士あり後藤將監國の遣子あり將監討死の際之を小寺官兵衛に托す其時八歳ありと云されば又兵衛は播磨の人あり成長して異域に迄も勇を揮ふ其心膽宜しく少年者の鑑たるべし(余の事蹟者に又兵衛の眞傳あり)

○細川の庄の事 (美囊郡)

昔鎌倉右大臣實朝和歌を好み藤原の定家卿を師とすされば和歌の永領地として播州細川莊を賜ふ子孫茲に住

す定家卿の男爲家の室は佐渡守度繁の女にて頗秀才あり老いて阿佛尼といふ爲教爲頼爲顯爲守を生む弘安三年異母兄爲氏細川庄を押領す阿佛之を鎌倉ある泰時よ訴ふ日記あり十六夜日記といふ泰時其訴をき、非法を止め地を爲相に與へ爲氏を譴罰す阿佛因て鎌倉に庵を結び終焉す夫より後天正年間に至り高名なる無双の學聖藤原惺窩先生此處に生る先哲叢談卷之一に曰く惺窩爲中納言定家十二世孫世食播磨三木郡細河村父爲純時爲土豪別所長治所侵掠爲純與長子爲勝禦之不利皆死云々於之爲純の室及惺窩先生は二子と共に京に遷居を以て後定家卿五十年祭毎に冷泉家より祭典を奉し公卿方の和歌を献納するの例とされり又揖東郡越部庄に越部禪

尼の墓あり古越部細川の邑といふ冷泉家世々の采地ありされり往々細川庄につき迷ふ人あり

○藤原保昌の事（揖西郡）

少將保昌は世に知る四天王と稱せられし一人なり老後播磨の平井庄に閑居して終を遂げしと云ふされば平井の保昌とは云ふあるべし墓は平井村にありとぞ其妻和泉式部の塔も加古郡野口西坂本村街道の北の方にあり此處を細田坂とも下居坂とも云ふ式部は一條院の時上東門院に仕へし有名の才女あり大江雅致が女初和泉守道貞に嫁し小式部を生む其後離別せられて小式部を播磨赤穂郡若狭野に放ち遣る又平井保昌に再嫁し小式部に逢はん迎此所に吟ひ書寫山の性空上人に値ふて法花

經化城喻品の從冥入於冥の文を説きしをき、和歌を詠す熊野の謠曲にかりぬのはりま瀉といふはこれ也とぞ依て式部が生涯を日記家集をどに考ふるに道貞と別れてより爲尊の御弟敦道親王通ひ玉ひ親王失せ玉ふて後保昌の妻とある保昌卒して尼とあり一條北白川誓願寺に隣る誠心院小御堂といふにありて專意法尼と云ひ年經て死す木像塔は京極東福寺誠心院にあり碑は誓願寺にあり小式部は内侍をつとめ母は先達て死せし事諸書に詳にして播磨の事書を見るかしされど和泉式部の宿り木てふもの若狭野にありたりとぞ栗の木さるよし里俗に云ふ昔此處に森五郎太夫と云者あり京都より去て小式部を拾ひあへりてけるを母の式部尋ね來りて折しを時雨ふりければ此の木の下に舍りて(此の木かれて今はなし)

しほの間よものうらぐ尋ぬれど今は我身のいふのひもなしとちんよみけるとぞ此歌古今集雜の中讀人知れずとあり恐らくは作り譚あるべし(保昌は丹後守にて本姓藤原あり世に頼光の臣とあるは四天王の違ひとありうく誤りあるからん俗説辨を參照せば其妄を辨ずあらん)

○上月城 (佐用郡)

城趾は上月村にあり最初の城主は赤松頼景なり上月十郎政範(政則の子)及び毛利氏の枝城とありしが天正五年十一月羽柴秀吉攻め取る六年六月迄尼子四郎勝久山中鹿之助幸盛をして守らしむ同年四月毛利家の將吉川

元春小早川隆景浮田直家等大兵を擁し來り攻む東軍の援兵數々利を失ふのみ七月遂に城陷る勝久幸盛自殺す一説に云ふ幸盛出で、降ると蓋併説なるへし今左は落城の大方を記すべし(史學普及雜誌の記する處を見るに鹿之助の墳墓は岡山縣中川郡落合村大字阿部小字渡場と云ふ處にありとさて又全く首級を埋めたるは同村小字赤羽根と云ふ處にて同地方古老の説に鹿之助播州没落の時此地は落延來るや敵の雜兵船子に拵立高梁川の中流に漕ぎ付け竹藪の傍を過ぎんとするを長槍を把て刺殺したるものありと云ふ又位牌は阿部の觀泉寺にありて毎年舊七月二十一日の夕は盂誦ぼんおどりをなして暗に其靈魂を祭るとか鹿之助の裔は廣島に二人丹波に八人ありとか噂あるよしにて建碑の舉も掛らざりしに同地方の有志者去頃盛大の祭典をちして其靈を慰めたる由あり)

此の戦に援軍怠て進まず光秀京都にあり秀吉の功をかさ

んを嫉み偏執の餘信忠の後誥を拒み秀吉座がら城兵の苦を見るも救ふ能はざりき當時陣營を扼守せし山は高倉山にして戦血の流れし川は熊見川今の千草川あり扱も上月の城には後誥退陣して籠城叶ひ難ければ敵は云ひ送る様當城外援盡きぬれば心よく討死致すべきの處所詮功あき戦ふ双方の將士數多死傷せしめんはいと便かた業なれば大將勝久及山中鹿之助神西三郎左衛門加藤彦四郎等宗徒の者切腹いたし士卒の命に代ふん此儀許容あらバ毛利家の鴻仁感佩の至りありと兩川其信義忠勇を賞し直に承引を翌廿九日城中の軍卒悉退城せしめ毛利家より香川兵部大輔春繼平賀太郎左衛門元祐の兩人來り檢使の旨申ければ鹿之助堂上に請し禮を正し勝久以下五人の切

腹を見届け已れも腹十文字と搔切り永く此世を去りにけり時に四十五才あり兩使歸り報ず兩川吉川小早川感歎し其首級を雲州に送り富田月山の城下尼子一家の菩提所へ葬り佛事供養修行しける聞く者袖を濡しける幸盛偽つて毛利氏お降り輝元に近付き刺さんとす隆景之を察して備中松山の麓阿井川にて天野元明を命じ銃殺せしめたりともいへりされど想見記などの説も義死せるを是なりとせるやに見ゆ

○赤穂義士の事

元祿十四年辛巳三月十二日將軍綱吉天使を饗應す赤穂城主淺野内匠頭長矩款待の事を掌る伊達左京太夫相役たり吉良上野介義英高家を以て之に參す義英性貪慾にして私多し長矩

賄賂をなさざりし故に辱を受けしはその一因おはあれど己は松平家茶會の節より宿怨ありしあり翌々十四日衆中に長矩を辱しむ長矩怒り此日廊下よ於て之を傷く將軍綱吉死を長矩に賜ひ其邑赤穂を籍没を遣臣等長矩の弟大學をして祀を繼グしめんとして種々工夫せしも就かず遂に十五年十二月大石良雄父子原元辰吉田兼亮小野寺秀和等其徒四十餘人雪夜に乗じ義英の邸を襲ひ仇を復す明年二月皆死を賜ふ此事實たるや一時天下の衆人をして柔弱怯懦の夢を警醒せしめ幕府有司の耳目をして聳動驚潰せしめたるの珍事たりた、室鳩巢のかきたるもの及介石記赤穂異變聞書等は甚正確なる書あり余の稿にかゝる赤穂事變今譚と題して東京播磨助長會雜誌に連載せり此頃諸所の新聞雜誌等に轉載せりと聞けり

攝津の部

○福原部の事

攝津國矢田部郡(今の八部郡)福原の庄兵庫は應保三年三月
 中(又承安三癸巳年)に築嶋成就して(利教曰治承四年は紀元千八百四十年
 ちり、筑嶋の由來は余か事蹟者お委し)後平相國清盛入道淨海の沙
 汰として此所に都を經營し既に事成つて治承(又嘉應)四
 庚子年六月二日人皇八十一代安徳天皇其時寶算三一院上皇
 歲に座を攝政殿を始め奉り太政大臣以下月卿雲客平家ふの太政
 入道を初め一門の人々其外百官人民悉山城國平安城々
 り此福原お移り玉ふ池大納言頼盛の山庄皇居と成(荒田
 村に古跡あり)同九日新都事初有べし迎上卿おは徳大寺の
 左大將實定土御門宰相中將通親奉行おの前左少辨行隆

多くの官夫を召具して和田の松原西の野をてんじ九城
 の地に割たまふ然に一條々り五條迄は有つて其下の地
 ちし公卿區々僉議有りしかども百數の政事行のれを依
 て又變改ありて同じた年の十一月廿一日舊都お還幸を
 し奉る大政入道の此地に暫く住玉ふ云々此事平家物語
 に委しまゝ源平盛衰記には新都地形の事を記して云北
 の神明垂跡生田廣田西の宮各薨を並べたり盡せぬ御代
 のしるし迎雀の松原菟原郡住吉より御影邊迄の南西
 濱邊也太平記などに出でたり御影の森千
 代にあはらぬ緑なり雲井お晒す布引の瀧の白玉岩間に
 つらね後を願れば翠嶺の雲を挿む曉の嵐漠々たるを吐
 た前を望めば蒼海の天をひたせり夕陽の沉々たるを吞
 める湖水漫々として遠帆雲の浪に漕ぎまされ巨海茫々

として眺望煙波に眼を遮り月の名を得たる須磨明石淡
 路島山面白く螢火燃ゆるあし屋の里菟原郡あり古へ歌の名所也の夏の
 暮いづれもとりぐに心澄たる所あり
 清盛常に福原の地を愛し嶋を築きて漕運に使あらしめ
 心筋に計畫せる折柄諸源蜂起し世体容易なふざるに及
 びあわて、都を遷し帝を頼盛の第に奉し遂に自邸に徙
 し三間の板屋(半御所)に法皇を幽しけるが地不便にして
 物論囂しければ法皇を夢野八部郡にあり昔聞鶴野と云ふ日本紀の仁徳天皇の鹿の事より變名すに徙
 しまわふせ遂に公卿を會して兩都の利害を諮ふに衆皆
 清盛を畏れて福原便ありと云ふ左大辨藤原長方獨平安便
 ありと主張す終に舊都に復す想ふに清盛の傲戻ある長
 方を信せしと雖直に長方の言を従ふ者に非ずこれ初遷

都の事ありしは一時清盛の權謀に過ぎざりしかれば也
 ○一の谷及生田戰

壽永三年辰二月源範賴同義經福原を攻めて之を陥る是
 より先き平宗盛山陽南海を復し行宮を福原に造り(利教
 曰初の筑城は壽永元年即紀元千八百四十二年あり)一の谷を以て西門と
 し生田を東門とす兵勢大に振ふ是より至り賴朝法皇後白河上皇を
り嘉應元年三月の宣旨を奉し範賴等をして之を攻めしむ範賴
月剃髪し玉ふ東門に向ひ義經西門に向ふ土肥實平をして之に當らし
 む自輕騎を率ひ鵜越の險を踰ぬ城後より之を襲ふ範賴
 實平亦二門を破り三面合撃を平軍大敗せり此日源軍に
 河原太郎高直同次郎盛直(武藏人)と云ふあり生田森に先
 陣し二人共平軍眞鍋五郎助光(讃岐人)が矢先にあり討

死す又梶原源太景季は梅花を箆に挿み奮戦す父平三景時之を援け出づ又父子二度の駈をあして敵兵を惱まそ生田社内箆の梅 木村源五重章近江人は越前三位通盛と討死す通及梶原井あり 猪股小平太六則綱は越中前司行年三十才墓は兵庫をさること西十丁余舊兵庫街道南池の端邊あり 盛俊を誦謀り討つ此も墓は西代村西山手あり 岡部六彌太忠澄は薩摩守忠度を討つ行年四十才墓は駒か林の西一丁程の所にありこは眞の塚にあらざるべし 忠度は明石兩馬川にて討死す乃腕塚は大明石村人丸山の下にあり又本墓は熊谷次郎直實は無官太夫教盛を討つ(墓一同村忠度丁にあり) の谷にあり)直實此の曉よ平山季重と先陣を争ふ土屋宗遠は藏人太夫業盛(年十七)を討つ本田次郎は備中守師盛(年十四)を討ち莊の高家は但馬守經正を大藏谷よ追ふ經正馬より下つて自殺そ名和の太郎は若狭守經俊をうちけり其他武藏守知章は討死して父知盛を西海に落し淡路

守清房(年十六)尾張守清定等も討死せり宗盛以下帝を船お奉して西海に走れり其内裏跡は一二の谷の中間にありて所謂上野これなり

○附記 鷲尾舊迹(下村)家紀あり云桓武天皇の皇子葛原親王十四代安濃津三良貞衛が孫桑名次郎清綱よ始て鷲尾の姓を玉ふ清綱次男武久を鷲尾の庄司と號し山田の庄に居住す義經一の谷戰場に鶉越の難所を越ゆる時武久案内者に應諾して生年十七になる一子を奉る是を鷲尾太郎經春三良經武とも云ふと云ふ大將の諱を給ふかり義經に従ひ一騎當千の勇士とちる義經の武久お與へし兵具は
 一太刀 一振長二尺七寸 大原眞守作 一鎧 一領 一陣幕 一張 一箆 一流日の丸
 一武藏坊辨慶長刀同太刀 長四尺三寸 一龜井六良太刀

一椀一膳、經七寸武久常器也

右代々傳來す眞守の太刀は後世秀吉に獻せりと云ふ又
敦盛の一の谷なる墳はまことは平家討死者の靈魂を慰
めん爲ふ建てし所謂あつめの塚かりとも云ふ

○湊川戰

湊川は昔兵庫北の出口門より一丁余の街道の川あり

千載集道

みちと川夜舟漕出る追風に鹿の聲さへ瀬戸渡るなり

因の歌

夫木集爲 湊川うは波はやくかつきえてしけまで濁る五月雨の頃

延元々々年五月尊氏大舉して入犯す海陸皆兵あり義貞白
旗城の圍を解け退て兵庫ふ屯す乃正成を詔して赴き援
けしむ正成賊を縦ち京師に入らしめ糧道を絶ち之を攻
めんと請ふ參議坊門藤原清忠等之を沮む正成涙をのん

で櫻井驛

今に古跡あり楠公焼を製せ清水氏と云ふ渡邊昇氏楠公訣兒の處てふ標石を建てたる

に至る子正行に

遣訓して河内に歸らしむ進んで湊川に陣す烈戰數度其
騎剩す所僅七十余騎營王山廣巖寶勝禪寺の客殿如意庵
に於て弟正季等と自盡す

世間唱ふる處は 此寺は坂本村にあり後醍醐天皇勅願にて開山煇惠明極和尚草創本尊藥師

如來堂を瑠璃殿と稱す正成の影像并に一代記あり

正成
の戰死實に建武三年丙子五月二十五日あり後世貝原益
軒兵庫の富豪北風氏とはあり碑を建んとし益軒思ふ所
あり迎俄に之を止む其碑稿同氏にありと云ふ余頃日北
風如瓶氏に之を聞くにその稿紛失して今はあしと元祿
四庚未年水戸黃門光國公古墳を再建して碑石を立つ碑
裏の文明の朱舜水の撰あり其往昔にありては塚標たゞ

梅松二樹の生存せるのみありしと
利教曰延元々年は紀元千九百九十六年なり又一書に光國卿の建碑は元祿八年即紀元二千三百五十五年とあり

○長田神社傳説 (八部郡)

長田神社は八部郡刈藻川の續右に鳥居あり今國道の北傍此額小野道風の筆あり馬場並木に入長田村の内なり毎年八月十八日祭典あり古へ神主大中臣式内の舊社にして現今官幣小社たり祭神一座事代主尊攝社二座神寶に九穴の貝ありと云
苜蕪川は木村源吾塚の西にある小川あり平家物語落足に云平重衡の湊川苜蕪川をも打渡り蓮の池を右手に見駒が林を左手になし板屋と須磨を打過て西をさして落玉ふとあり

神功皇后伐新羅玉ふ明年二月皇后之御船廻於海中以不能進更還務古武庫水門而卜於是事代主尊誨之云

祠吾千御心長田國即以葉山媛妹長媛令祭村上天皇應和三年七月十五日於當社雨の祈あり尙延喜式神明帳お委し長田の里夫木集に兼仲のうた雨つのもめぐみあまねた時あひて長田の里に早苗取也

利教曰務古の水門は和田の泊とも云ひて今の兵庫港なり

○有馬温泉の事 (有馬郡)

有馬の湯は日本第一の名湯にして有馬山鹽原山とも云ふの麓あり古昔孝徳天皇湯山温泉あり御幸ありしとき行宮の用材を山口村の山林より伐る故に勅して其山を功地山と云ふ巨樹密叢す莖原郡三條村に湯元の薬師あり搦通

山と云ふこの有馬温泉の潮は熊野權現(紀伊)の神力にて南海より蘆屋の浦(菟原郡)より引通ふと云ひ傳へて往昔は有馬温泉山の僧坊月次參籠して此尊像を拜す後世伽藍破壊して草堂となり只昔の松残るのみ仍て湯元の松と云ふ此湯の根源甚古きことにて神代の發見と云ひ又檀林皇后の浴湯より初まるとも云ふ舒明聖武の二帝をはじめ行幸し玉ふこと多し又織田豊臣以下世々公卿諸候の來遊せるもの勝て數ふべからず湯泉夏の澄みて清く冬は濁りて赤ぐろ如色をさせり

即泉源二ヶ所にして浴舎を南北の二區に分つ鹽類泉にして湯温百度諸病に効あり此地又風景の勝あり目下旅舎櫛比して壯宏を極む

○求馬塚 (菟原郡)

求馬塚又處女塚乙女塚とあり乙女塚はうさね乙女の塚

と云ひもとめ塚は二人の男即小竹田男及び千努男の塚
かりと云ふ

右三ツの塚一は生田川東味泥村あり一は遠目村一は住吉川西御田村にあり各十餘丁を隔つ萬葉集に福麿の歌

いにしへの小竹田をこの妻とひしうさね乙女の置築は是

芦の屋のうさね乙女のみきつたは行人にみれば音のみしなかる

塚の上の木を枝をひけり聞かるとちねの男にしよるべけらしも

此謂れ大和物語歌林良材集等に委しければつきて見るべし今はその大方を書き付くべし昔津の國芦屋の里に住女ありうさね乙女といひ慕ふ男二人有けり獨は兔原の氏小竹田男今一人の和泉國千努氏(血沼)ますとをとな

ん云ける其男其の年比貞容心襟迄同じやうありいろくに懇を通ひしけるに女さらにとりあはず二人の男ますますお切かり女思ひ煩ひぬ生田の川に平張ヒラガを打其よばふ二人の男を呼て女の親の云ふやう此川は浮て侍る水鳥を射てあて玉のん方へ奉ふんと云男共いと々き事迎射るに一人の鳥の頭を射つ今一人は尾のかたを射ける何と云ふべくもあらず女思ひ死りて

住位ぬ我身をげてん津の國の生田の川は名のみかりけり

と詠みて身を投げぬ二人の男も續いて同じ所へ身を投果をはんぬ親いみじく悲みて取上葬りぬ男の親共聞傳へ來り此女の塚の旁に塚を作り埋む時に津の國の男の親の云ふやう同國をこそ同所に塚をせめ他國の人は争

であ此所の土を犯すべきやと妨ぐるに和泉の親頓て和泉より船にて遠く運び終に埋めたりける此塚に木楊の小櫛をうめければ生つきにけり今の世迄も土の色はかりてけり塚中に誑ひしてふ大和物語のあやしき説もいと面白し

伊勢物語にや芦屋の里に知るよし、て往きて住みけり昔の歌の里ありけりとして

芦の屋の灘のしはやさいとまなみ黄楊の小櫛も挿さずきにけり

堀川百首に俊頼

求女塚おまへにの、る柴舟の北氣にあれやよるのふもあし

延元々年五月足利兄弟九州より東上せるや官軍兵庫に拒く正成戦死し新田義貞復遂に利あらま白く殿して數

々返り撃つ馬殪れて徒立ちとちり求馬塚は上りて救ひを待つ敵環つて之を射る義貞二刀を揮て十六箭を截りはらひ危急云はん方おし小山田太郎高家遙に之を見て取て還し己が馬を義貞に授けて留り奮闘して死す義貞因つて脱そるを得て京師に歸る初高家軍に従つて其卒民の麥を刈る民之を訟ふ法當お斬るべし義貞人をして其營を見せしむれば則鎧馬鮮にして粒粟おし義貞の曰くこれ吾罪なり士は亡かふべうらず法は亂るべあらまど乃爲に田主に償ひ粟を高家お給せり高家大お徳として心に報恩を誓ふ於之克く其難に代りて死せり其の麥を刈りたるの地どの何處縣下揖東郡廣山莊立岡村ありけり里長の所藏記ありて更に疑ふ所おしとぞ太平記も

は只播州とのみ記せり

○伊丹の事 (川邊郡)

攝津守荒木村重信長に降り上月の後詰として行きけるは私お信長を恨むことありて秀吉の計策おも隨おず合戦を餘處にしてありけるお遂お伊丹お歸り抜く信長之をさ、人を遣おして慰めけるに村重陽に服して陰に敵對の用意しければ信長大に怒り其年天正六年十一月親お兵を率おて之を討つ秀吉の策を用ひ村重に従ふ高山右近を降し高槻城又中川瀬平茨木城をも降すされお進て星陽野川邊に陣し花隈城を陥る神戸市の山手におり大坂門跡紀州雜賀一揆の籠りし事あり但村重の居城のッあり十二月八日伊丹を攻む速戰陥らす信長長圍を築き全月廿三日歸城しけり村重は丹生山(攝津の國境にて攝津の内)に兵

頼を蓄へ別所長治と通じけり侍従秀長風雨の夜に乘し
 攻めて之を陥る而伊丹猶堅固かり高山中川頻々降をす
 、むれども忻かずされバ信長大軍を以て一息に潰さん
 とそ村重聞きて或夜城を出で、尼崎の城に入る因て伊
 丹や、勢を失ふ瀧川一益反應者を得て一時に攻め入り
 大捷を得たり伊丹の留將荒木久左衛門茲に於て城を渡
 玄尼が崎に至り村重に降を勸む仍て織田信澄をして伊
 丹を守らしむ村重き、て久左衛門を納れを迷ふ城(伊丹)
 中の男女老弱を戮殺せ(丹生山は八郡郡山田村の西北に屹立せる高山にして斷崖幽谷晝猶暗く靈氣人を喪ふの深山りか)

○多田村 (川邊郡)

源氏の祖貞純親王の子六孫王經基武勇絶倫にして藤原

忠文と共に將門を討し又小野好古と共に純友を討つ屢
 功あり正四位下鎮守府將軍とあり攝津の多田に居る今
川邊郡新田村 長子滿仲多田に生る滿仲の時花山院鼓の瀧に御幸ありて滿仲は詞を賜ふと云ふ 父
 の職を襲ぎ大に士心を得たり冷泉帝安和二年中務少輔
 橘繁延前相摸介藤原千晴と密かに爲平親王を挾んで關
 東に奔り乱を爲さんと謀りしも素より繁延と隙ありけ
 れバ遂に自首せしに攝政實頼の旨を以て弟滿季と共に
 繁延千晴等を捕へ之を流せり滿仲嘗て曰く武臣天子を
 警衛するに利刀あかるべからずと乃筑前の良治某を呼
 び上し鍛鍊六十余日おして二刀を得たり之を以て死囚
 を試みしに其余勢一は其鬚を截り一は其膝を斷つ因て
 鬚截膝圓といふ源家の傳寶たり滿仲左馬頭にて卒す左馬頭

從三位を贈ふる四子頼光頼親源賢頼信といふ源賢は僧たり頼親興福寺の僧と鬪争して流さる子孫大和にをる大和源氏といふ頼光最材武あり（渡邊綱源次 箕田の坂田公時確永季武卜部季光方性貞光等の勇卒あり（東宮の大進たり一條帝の永延中攝政兼家の新弟を造るや頼光馬三十四匹を遣つて賓客に分つ兼家の子道隆攝政を興ぐ其弟右太將道兼之と權を争ふ頼信道兼に親信せらる頼光に曰ふ吾が力よく道隆を刺さん以て吾が主をして代ふしめん

と頼光其口を掩ふて曰く妄言をすまかれ事もし敗る、ときは肝腦地に塗らん汝が主亦豈晏然として止むべき

ふは頼信乃止む頼光三子あり長男頼國の子孫世々多田に居り攝津源氏といふ此事細大共に前太平記に委し多

田は今の多田村これあり多田神社として滿仲以下を祀る同郡滿願寺は其菩提院あり此邊古跡散在す維新以後に至る尙無祿士族あり社の四圍に居宅す宛然一藩邸の如し（旗指山は川邊郡西多田村にあり滿仲旗を立つ故に其名ありと云ふ）

○阿保親王の御墓（菟原郡）

厩は打出村上手にあり親王は平城天皇第二皇子三品彈正尹贈一品に渡らせ玉ふ仁和三年御子在原行平朝臣少過ありて須磨に配流の時此廟を遷されたるよし打出村の内に則阿保山親王寺と云ふ寺ありとぞ打出村に向へる北の岡山に於て親王金瓦一万黄金一千枚を埋めさせ此里人飢饉に及ふ時あつた堀り出で、養ふべしと云はれしとちんよつて金津の号ありと俗傳に云三十一字を以て是を傳ふ

朝日さす入日輝くこの下に金千枚瓦万枚と云々

乃親王老後閑居ありし地おして他に又事由あるをしそ
べて此邊葦屋の里をはじめ行平卿領地ありければ此由
縁にて業平卿も暫く假居せられたることあり

新古今に業平の歌

晴る夜の星の川邊の螢も我住かたの海士の焼火か

これ業平假居中の作なること知るべしすべて此の邊猿
丸太夫の塚又は公光の栖みし處或は頼政の鶯塚藤菜屋
敷などの古迹あり播州ふも菖蒲前の塚及頼政の領地を
りといふ處などあり

○神戸の開港

昔の神戸村は宇治川のつゞた往還の村おて太平記お紺

部とあり西の口を走水次を二つぢや屋東を神戸と云ひ
て三所あり相つゞく此所より諸國の回船々持多しと古
書にいでたり

和名類聚は神戸村とあり古語拾遺曰崇神帝六年祭八
十萬群神仍定天社國社及神地神戸始令實男弓弭之調女
手末之調云々蓋神戸の起因此は出づるおん即神戸と
の神社に属する領地の民戸を云ふなり故に國々の郡内
に往々地名となりて存す當神戸港の其一あると明けし
尙序お縣下にて神戸と云ふ名の見おしを擧げん攝津國
八田郡神戸、播磨國明石郡神戸、攝保郡神戸 其粟郡に神戸あり
昔神功皇后三韓退治歸朝ありてこゝにいたり給ひ異國
の俘又首級を實見ありし故頭村と云ふあると云傳へた

慶應元年十月朝廷始めて外交を許さる初幕府外交を修むるや假に三港を開け漸次他港に及ばすを約す其後兵庫開港の期近くも未だ許さず是に至り兵庫ある英佛米和等の國々の公使迫りて止まらぬ家茂上言して遂に横濱箱館長崎を許し獨未だ兵庫を許さず今上天皇即位し玉ふ即慶應二年將軍慶喜公使を大坂城に延見し又上言して切に勅許を請ふ朝議時を察す列藩亦之を可とす同年十二月大坂と共に兵庫港互市場を開く即條約而神戸とはあらず兵庫とあるなり即兵庫港を互市場の埠頭とす然して慶應三年の開埠にして明治三年の開港たることを知るべし

○先之嘉永七年(此年改元即安政元年あり)甲寅三月三日西曆千八百五十四年三月廿一日調印濟但兵庫港の五十六ヶ月の後に開港の約をあす即文久二年十二月兵庫開港の期に迫れり幕府安藤閣老負傷中なるを以て竹内下野守松平石見守等を渡歐せしめ大に説く處あらしむ尙安藤閣老をして英國公使アールコックを説きて歸國せしめ遂に五年延期を約諾せしめたるあり又其條文中に云ふ兵庫は京都を距ると十里の地へは各國人立入さる筈に付其方角を除く各方へ十里且兵庫に来る船上の乗組人の猪名川より海灣迄の川筋を越ゆべかたそ云々四國公使横濱に於て兵庫の先期開港を議するや外國奉行栗本安藝守(鋤雲)之を論破し文久二年倫敦覺書に於り慶應三年十二

月(千八百六十八年)に開くべしと主張し遂に議決せしめたりき

淡路の部

○淡路島傳説

神代のむかし伊弉諾伊弉册の二尊天神の詔を受けて天浮橋に立ちて天瓊戈を以て滄海を探る海潮其矛尖々り滴下し自ら凝りて島とある是淤能基呂島なりかのづから凝るの義なりと云ふまたあまりに少國なりければ二神吾はちと宣ふ故に國名とそちの少の義なりとあされと假字にてはあわぢと書くべし二神其島に降りて夫妻と爲り大八島諸島諸神を生み玉ふと云ひ傳へたり伊弉諾神社は津名郡多賀村にあり國幣中社にして祠宇

壯觀境内巨樹森茂し最幽穆たるの勝景あり尙

左に淡路常磐草より援抄をべし

日本書記神代卷曰二尊磯馭盧嶋又降りましてみとのまぐはひして州國を産むとあはす産時お至りて先淡路洲をもて胞アとす意マカ、ウに快オホクバざる處なりとて淡路洲といふかり舊事紀曰淡路は吾耻也按よあはわれかり古語にわれをあれといふあはちと号くることあわれはづあいの意なりと
釋日本紀曰二柱初て小嶋を生玉ふを深く耻たまひきこの故に吾耻島とあつけしと按に云こは非かり洲の小きを耻玉ふにあらむうい子産てはぢかふの婦人の常情あれバあり利教曰國号説解のあち即ち、は、小、あ、り、こ、と

のほう小ありしと宣ひしてふ説の恐らく轉過ならんか
國名風土記には滄海の中に路を生ずるも茲に淡路とは
号くるとありこは字およりて立てし辭説あり日本紀は
阿波施に作る萬葉集は粟路をふけり伊佐奈岐神社
延喜式曰淡路國津名郡淡路伊佐奈岐神社 名神大

三代實錄卷二曰清和天皇貞觀元年正月廿七日甲申京畿
七道諸神進階及新敎物二百六十七社奉授淡路國无品勳
八等伊佐奈岐命一品

先山よある千光寺緣起略に曰此界いまだ開けざりし先
に二尊天上より海底に大日の種子現せるを照覽して降
り天浮橋に立て逆鋒を下し探り玉ふ鋒の滴り凝て嶋と
おれるをあはちよと宣ひし故又國に名つけて淡路とは

号す云々(先山は津名三原兩郡の境に緯也)

大榎並村 三原郡北にある田間の細流に渡せる二三尺許の

古石橋を天浮橋と云ふ按に云日本紀に二尊天浮橋の上
に立て瓊矛を指下して滄海を探り玉ふとあり此州は大
八州のちりいづる初といへるよつけてその神代の事を
取て後人の名つけたるなるべし釋日本紀お引る丹後の

天橋立播磨の八十橋をど、趣同しあるべし

利教云播磨の八十の岩橋の印南郡益田村 古風土記にあり
加古川の上の方に

あり天然の奇觀たり又沼島と稱するは磯馭盧嶋の事を
りと云ふ

こはぬすこの島と云ふべきを略してぬしまと後世名つ
けしなるべし

釋日本紀引公望私記曰問此島有何意名之乎答是自凝之島也猶言自凝今見在淡路嶋西南角小嶋是也云俗猶存其名也

釋紀曰或說今在淡路國東由良驛下又曰或說云淡路紀伊兩國之境山理驛之西方小島云々然而彼淡路坤方小嶋干今得其名也

○洲本城（津名郡）

洲本城の洲本に趾あり山上に古松翠を積て城樓の臺榭石壁多し山下に壕石壁あり昔は國君の殿舎あり國老稻田氏の第宅立つ、さて此城を守れり内外町の間にも壕の内に門臺の石壁あり其餘櫓臺等あり諸士の宅地内外の坊間に多し此城もと由良の安宅氏の族人居住せしを

天正九年安宅河内守織田公に歸降せし後同十年仙石秀久お賜ひて居住す同十三年乙酉より慶長五年迄は脇坂安治居る封額四万八千石元和元年蜂須賀氏に加賜有し後寛永中國老稻田及長谷川に命し大に經營せしめぬ然るに此時東都一國一城の令ありて此事止む而此城西國の要路にあるを以て破却せず

○附記仙石秀久初權兵衛と稱し後越前守と号す始て羽柴秀吉に仕へて軍功あり天正十一年秀吉諸將の功績を賞し秀久を淡路に封す俗云秀久薄田隼人と共に石川五右衛門を捕ふと同十三年四國平

治し讃岐を賜ふとちん太閤記將軍家譜武林傳をぞに見ゆ但馬出石城主は仙石氏あり脇坂安治初甚内と稱し後中務少輔に任す父卯助安明近

江人あり安治虎御前山の戦より秀吉に属す天正十一年
柳ヶ瀬合戦も勇功群を援く者七人安治共一人あり秀吉
之を賞し祿五十石を加ふ安治十三年に及び加藤左馬之
助嘉明を^{志知}城淡路に居しひと天正記武林傳等に見ゆ州本
居城二十五年にして伊豫大洲に移る
播磨龍野は脇坂氏の居城ありた

○淳仁天皇の遺跡 (三原郡)

天皇は四十七代の帝にましくて天武帝の孫にて舍人
親王の第七子也大炊王と稱せり孝嫌上皇惠美の仲磨^押
を寵え後僧道鏡を寵せたる仲磨怨恨遂に反す討ちて之
を平ぐ初帝押勝にとつて立つことを得たまふ此に至つ
て上皇帝を以て押勝に覺するどちし且禊祓の意あり天

平實字八年十月兵を遣はし中宮院を圍み帝を廢して淡
路公とあしたまふ帝外戚西三人と歩して圖書寮の北あ
出で、宣詔を受け淡路に徙され玉ひ一院に幽し奉る天
平神護元年十月廿三日崩御し玉ふ御歳三十三即御陵は
三原郡賀集村ありて森樹鬱茂し頗る陰寂たり諡號は
明治の世の御追贈にかゝる天平實字八年は即紀元一千
四百二十四年あり一書に遷幸の地三原郡今の十一箇所
村と記を

今左に常盤町より抜抄すべし

淡路陵賀集中村にあり今天王森と稱す或は杉尾森とも
云ふといへり山陵周廻三百七十間許其東面は山お添ひ
池あり界内に廢天皇の神社あり神宮寺あり修験の僧之

に住す社南最高所を高場と云ふ則尊體を藏め奉る處なるべし丘陵綠樹茂る
延喜諸陵式曰淡路廢帝陵在淡路國三原郡兆域東西六町南北六町守戸一煙遠陵帝王編年紀曰廢帝御年三十二奉葬淡路國三原郡遠陵の皇都より路遠に故に云ふ守戸の守衛の百姓家也

天王森の丘上に淡路天皇祠及陵下に神宮寺あり

附説

高野天皇天平神護元年冬十月庚辰淡路公幽憤又勝玉はすして垣を踰て逃れ玉ふ國守佐伯宿禰助國椽高屋連並不等兵を率て止めしめは返り玉ひてあくる日院中にうせ玉ふ

水鏡曰天平寶字九年に淡路廢帝國土をのゐい玉によりて日てり大風ふきて世の中わろくて飢しぬる人かけありたど申あひたりき
廢帝當州に居玉ふこと一年許或説に弑させられ玉ふちるべしと誠まさもありぬべし御いたましきあましにこそ

○又下川井村に崇道天皇山陵あり俗に高島と云ふ松の生たる圓山あり里人淡路廢帝の陵と稱して毎年正月九日八月九日に神祭をあすと云ふこの謬説なり廢帝陵にあらむ

光仁天皇天應元年三月位を山部親王に譲り玉ひ同月皇弟早良を太子とそ藤原種繼賊の爲に殺され爲に早良を

廢して安殿を皇太子とし玉ふ水鏡に十月東宮をおどくに
 てらおこめ奉り玉へしに十八日までは其命絶わたま
 はざりしかば淡路の國へちがし奉り給へしに山崎にて
 うせ給ひにき
 この早良種繼と御ありければ人をして殺させ玉ふ天皇
 痛悼して太子を罰し玉ふ
 然るに桓武天皇延暦十一年六月崇道天皇の靈を謝し玉
 ふ後十七年三月勅使參議五百枝を淡路國に使して早良
 親王の骨を迎へて大和國八島陵に收め葬る十九年七月詔
 して崇道天皇と追稱し其墓を山陵とそ

丹波の部

○龜山城史談

天正六年春二月惟任日向守光秀主人織田信長の命よ
 り細川藤高と四千餘騎の兵を率ゐて丹波國大江山に陣
 す時に龜山城主内藤五郎兵衛尉忠行死して未だ其嗣を
 し家臣内藤和田等歸順して龜山城を光秀に授け以て臣
 事そ光秀龜山城に入りて國政を執るや國中の士續々來
 り歸する者多し並川、四王天、荻野、婆々伯部、中澤、酒井、宇野、加治等然るに同國あまらべ過部の城
 主福井因幡守貞政は歸服するの心をくして居城に籠り
 敵對そ光秀大に之を攻むこゝに宇津の城主宇津右近太
 夫友宗の貞政お心を合せされば援軍として來る途に細
 川刑部大輔が手に敗れて死すされば八鹿部の城主波
 多野中務丞も援軍の約を背き來らず貞政の軍日々に盛
 り遂に落城そ光秀勝に乗じて進んで諸城を陥る天正六

年五月木下小市郎秀長又信長の命により光秀を援け來り攻む戰勝多し茲に八上の城主波多野右衛門太夫秀治舍弟遠江守秀尙又敵對す秀長氷上城主波多野泰とも宗長を討ち播磨へ歸る蓋信長の命にぞりて三木城を攻むるの應援をあすあり八上城未だ勢不減されバ光秀藤高後よ幽齋等と議し種々に秀治を招く然れども來らば遂に謀りて秀治兄弟を招く秀治等降るを肯んせず光秀母を送りて賈とあし他あきを示そ秀治降る光秀誘ふて之を囚へ安士信長居城お送る道にして秀治削の爲ふ死す秀治の遺臣怒て光秀の母を磔す光秀怒り更に秀尙以下を押送して八上の城外に至り之を磔殺し並に城兵をも戮にしぬ次て龜山の城に歸る後光秀反逆を企つるや兵を集め勢揃を此

城は於てあす(天正七年)即南桑田郡龜岡に城趾存す(京都府)

但馬の部

○生野史談 (朝來郡)

文久三年十月(十三日招魂社祭日なり)川上彌市郎南八平野次郎國高橋勇次郎美玉等澤主水正宣嘉を奉して兵を起し但馬妙見山に據る初國臣學習院に督長たり去つて長門に行き次郎は福岡藩主黒田氏の臣あり宣嘉と謀り但馬に至り聲言して曰く松平容保會津を討ちて關を叩きて冤を訴ふと土兵聚るもの甚多し同月十三日生野代官所を襲ひ吏を斬り金銀を掠む以て遙に大和の天忠組に應せんと期す幕府姫路豊岡出石かどの諸藩に命じ之を攻めしむ後烈戰遂に敗る宣嘉また長門ふ走る國臣捕へられて後斬らる八郎等戰死す三

平もまた數人と共に長門に走らんとして宣嘉を躡して
 宍粟郡木の谷に至り獵夫五郎の狙撃する所どかりて重
 傷を蒙り自餘皆旁の民舎に於て自殺す余嘗て妙見山下
 山口なる八郎以下の墳墓に詣りし事あり堂前常に香煙
 絶ゆることあり近時故山田伯鸞亦八郎氏等の墳碑を建
 設せられしと云く

利教曰生野代官は川上伊太郎と云へり又澤主水正は變
 後其踪跡知れざりしに明治元年正月廿二日歸洛せられ
 たり又妙見山は國の中央にあり養父氣多七味三郡に跨
 り頂上名草神社を祭る老樹蒼鬱まて山中良材多し

一説云澤主水正幼名姉小路五良丸あり其家に仕へし舊
 臣にして當時森垣村の里正たりし里見外記と云ふ者大

に公の此一舉に與みするを不可とし陣中に往き屠腹し
 て諫む公の脱走實に此に基くと云ふ

宍粟郡木の谷村に近時有志者墓石を建て題して美玉中
 島兩氏の墓と云蓋從四位子爵小笠原貞季君の筆にあり

又曰朝來郡山口村の八郎氏等の墳碑も爾來有志者の設
 計にて神社となし官修招魂社と稱せり

○仙石騒動 (出石郡)

天保六年九月幕府出石城主仙石久利秀吉の臣權兵衛秀久の後裔の封を削

り其老職仙石左京親友を流す親友の久利の庶叔父よし
 て久利の父久道に寵せらる久利封を襲ぐに及びて尙幼
 弱かり親友乃て己が子親定を以て久利に代へんとす其

黨と謀り久道を毒殺し又刺客を遣はして久利を江戸の邸に刺さしむ中々少邸監神谷轉、忠勇にして智あり之を憂ひ其難を救はんとして亡命して僧寺に隠る親友幕吏に請ひ之を捕ふ轉、親友の罪惡を具して之を訴ふ乃久利の封を沒收し親友等十餘人を所罰せり此事たる洽く世人の知る處あれバ茲に審りにせむ

○附記永祿十二年織田信長兵を分つて但馬を徇ふ時に池田勝政伊丹親興大和守先導たり但人風を望んで降り遂に守護山名氏を滅し旬月ふして但馬を平定して歸れり尙壽留喜嶽に下津谷伯耆守の城趾あり出石城崎の両郡に跨れる但馬富士と稱する三開山には新田氏の舊趾あり生野古城即前記山名氏の舊趾は荆棘の内ふ存せり

○附錄

縣下舊藩主名及石高表(明治歴史による)

現石家祿ハ辛未廢藩以後大藏省ノ檢査ヲ經テ各藩増減アリ故ニ此表ハ明治八年國債寮秩祿簿ニ據ル但修史局編纂明治史要ヨリ援ヌ

姫路	十五万石 八万三千二百十石 八千三百二十一石	酒井忠邦	侍從
明石	八万石 四万三千四百七十石 四千三百四十七石	松平直致	左兵衛督
篠山	六万石 三万六千三百二十石 三千六百三十二石	青山忠敏	左京大夫
龍野	五万八千九百九十石余 二万七千七百七十六石 二千七百七十六石	脇坂安斐	淡路守

尾崎

四万石
二万七千六百七十石
二千七百六十七石

櫻井忠興
守遠江

三田

三万六千石
一万五千二百九十石
千五百二十九石

九鬼隆義
守長門

出石

三万石
一万三千八百四十石
千三百八十四石

仙石久利
守讚岐

赤穂

二万石
一万七百三十石
千七百十三石

森忠儀
守越後

柏原

二万石
九千九百九十石
九百九十九石

織田信親
守出雲

三日月

一万五千石
八千三百九十石
八百三十九石

森俊滋
守對馬

豐岡

一万五千石
五千三百八十石
五百三十八石

京極高厚
守飛騨

山崎

一万石
六千六百八十石
六百六十八石

本多忠明
守肥前

林田

一万石
六千四百二十石
六百四十二石

建部政世
守内匠

小野

一万石
五千二百八十石
五百二十八石

一柳末德
守對馬

三草

一万石
四千八百四十石
四百八十四石

丹羽氏中
守長門

安志

一万石
四千五百六十石
四百五十六石

小笠原貞孚
守信濃

福本

一万五千七百七十三石余
三千二百四十三石
三百二十石四三八六

池田德潤
守但馬

参考

德島 二十五万七千九百石余
十九万三千七百七十三石五四
一万九千三百七十七石三五四

蜂須賀茂韶
守中納言

龜岡 五万石
二万八千三百八十石
二千八百三十八石

松平信正 圖書頭

改訂 增補 兵庫縣管内史談大要終

明治廿六年十一月三十日印刷
明治廿六年十一月五日發行
明治廿七年五月十一日再版印刷
明治廿七年五月十五日再版發行

定價金拾錢

版權所有

編輯者 兼 兵庫縣明石郡明石町ノ内大藏谷村四百五十六番屋敷 小野辰太郎

發行所 同縣同郡同町ノ内中町三十八番屋敷 藥師寺卯兵衛

印刷所 同縣同郡同町ノ内樽屋町三十八番屋敷 藥師寺文林堂

大坂心齋橋通備後町 藥師寺活版部

神戶元町五丁目 梅原龜七

吉岡平助支店

大坂心齋橋通順慶町 此村庄助

山水图

山水图
 景
 色
 清
 幽
 山
 石
 层
 叠
 林
 木
 葱
 郁
 水
 流
 潺
 湲
 舟
 楫
 在
 望
 烟
 霞
 散
 漫
 意
 境
 超
 然
 真
 是
 仙
 人
 之
 境
 也

此图写山水之清幽，景
 色之动人，真令人神往。

卷之三

ex 554

9

9

025610-000-9

特29-509

兵庫県管内史談大要 (改訂増補)

小野 利教 / 著

M27

ADC-3104



特

5